

嘉永6年(1853)小田原地震

江戸時代末の嘉永6年2月2日(1853年3月11日)午前10時過ぎ、相模湾北西部沿岸の小田原地方を、M(マグニチュード)6.7と推定される大地震が襲った。南関東・東海地方はそれまで数十年以上大地震がなかったが、この「嘉永小田原地震」のあとは、翌年の安政東海・南海両巨大地震、翌々年の安政江戸地震が続く。また、約4か月後にはペリーの黒船が来航し、幕末の動乱が始まる。つまり、この地震は、日本列島の地上と地下が騒然となる時代の幕開きとなった。

被害がもっとも激しかったのは、大久保加賀守11万3千石の城下町小田原のうち、城の北東側の街区と、北に続く足柄平野西縁の村々、および平野の北東側の現在の大井町付近だった。この範囲では震度6以上に達しただろう。

城下では、藩士の屋敷の全・半壊が約60軒、大・中破が100軒以上、伝馬人足役の町家の全・半壊は123軒、破損は430軒であった。それ以外にも、土蔵、長屋、社寺、土木構造物などの被害はおびただしかった。小田原城も天守閣が大破し、藩主の屋敷や役所が半壊したのをはじめ、櫓、門、蔵、堀、石垣などが大損害を受けた。激甚被災地域は現在の小田原駅の東側の繁華街だが、もともと地盤が悪くて地震に弱い所である。一方、領内の百姓家の全・半壊は約2,200軒、破損は1,200軒以上といわれる。

震度5の被害域は箱根・御殿場・真鶴などに及び、箱根山中では、落石や道路・橋の損傷などによって東海道の交通が約1週間途絶した。

不幸中の幸いは、小田原の町の3か所の出火がすぐに消し止められたことと、津波がなかったことである。死者も案外少なく、農村部の24人程度といわれるが、天気がよい日の昼前だった好条件が大きいだろう。

江戸では近來になく強く長い揺れを感じたが、震度は4の強か5の弱で、青山などで粗末な人家が数軒つぶれて怪我人が出たほかは、天水桶の水

が揺りこぼれたり壁が落ちたりする程度だった。

ところで、もし今日これと同じ地震が起こったとすると、当時大被害を受けた場所の地震動災害が現代的に形を変えて生ずるほか、山間の過密観光保養地の地盤災害や交通災害、初めて直下からの強地震動に直撃される新幹線・高速道路の被害など、新しい型の震災が大規模に発生して、空前の大惨事になるおそれがある。静岡県東部の御殿場・沼津・熱海方面も大きな被害を受けるだろうし、京浜地方にも思わぬ影響がでるかもしれない。

実は、小田原地方は、江戸時代初期以来、嘉永6年以外にも4回の大震災を受けている(それ以前は記録が乏しくてわからない)。それらは、寛永10年(1633)、元禄16年(1703)、天明2年(1782)、大正12年(1923)で、合計5回を平均すると、73.0±0.9年の間隔で非常に規則正しく繰り返した。ただし、現在の“公式的な”考え方によると、「これらの震災のうち元禄と大正は相模トラフ沿いのM8級のプレート境界巨大地震によるもの、他の3回はM7級地震によるものらしいが、震災の様相が少しずつ違うから同じ場所の地震の結果とはいえず、大地震が小田原直下で規則的に繰り返したわけではない」という。けれども、いろいろな理由から、フィリピン海プレートの運動に起因する弱面が小田原付近にあって、それが約70年ごとに地震すべりを起こすのではないかと考えるもある。あちこちで気まぐれに起こった地震の結果、小田原で400年間非常に規則正しく震災が繰り返したというよりは、大地震そのものがプレートの運動に支配されて規則的に発生したというほうが、自然なようでもある。

いずれにしても、やがて前回の震災から70年になるから、気休めの理屈をつけて万が一にも大地震の不意打ちを受けるよりは、研究も含めて、適切な備えを心掛けるほうが賢明であろう。

酒匂川筋原

十文字十日市

子安大山へん

堂新権現山

東海及び小田

系つて

山中大保長岡

出候材を

損も箱根湯本

左二子山辺

権現様山内

四社を

月永湖水

かまの

頼も夫々

山々

所々

ば外

といふ

記





嘉永6年小田原地震絵図(早稲田大学演劇博物館蔵)